

令和6年度全学FD・SD講演会：自ら学ぶ力の育成をめざして

はじめに：趣旨説明

進行（高等教育開発センター・武田元有）

それではこれより令和6年度全学FD・SD講演会を開催します。

はじめに教育担当理事から開会挨拶と趣旨説明をお願いいたします。

教育担当理事・山口武視

みなさん、こんばんは。このたび全学FD・SD講演会のテーマとして、「自ら学ぶ力の育成をめざして」というテーマを設定したところ、多くの方々に対面、またはオンラインでご参加いただきまして、ありがとうございます。本日のFD・SD講演会は大変タイトなスケジュールになっていますので、私の挨拶はこれくらいにして、本日の講演会の趣旨説明をさせていただきます。

近年の中央教育審議会答申では、大学教育の「供給者目線」から「学修者目線」への転換が重視される傾向にあり、2020年の「教学マネジメント指針」では、学修活動の改善とあわせて学修活動の成果を把握する必要が強調されています。

こうした動きを受けて、鳥取大学では第4期中期計画に際して策定した「ビジョン2030」において、「学生が成長を実感しつつ達成感・満足感をもって卒業・修了できる」教育体制の構築を掲げ、学修活動では「学びの需要に応える教育」・「自ら学ぶ教育」の整備を推進しています。あわせて、学生対応では「多様な学修者に対応した学修環境」・「学生支援体制」を重視し、学生の主体的な学修を促しています。

学修活動に関しては、学生の主体的な学びに対応し

た授業改善のための各種FD活動の展開や、学生が身につけた資質・能力を自覚するための「eポートフォリオ」の運用を開始し、このようなFD講演会を通じて情報共有をおこなっています。

今回は、学生対応としての「学修支援」をテーマとして取り上げました。各学部・学科それぞれ独自に展開されているチューター制や学生面談などの取り組みを相互に紹介・共有し、大学としての組織的な学修支援の在り方を皆様と考える機会としたいと思います。

具体的には、4学部を代表して4名の先生方にそれぞれの事例紹介を頂き、その後にご発表の先生方をパネラーとして、ご参加の皆様も交えた質疑応答・意見交換を行いたいと考えています。オンライン参加の皆様も含めて、本学の目指す大学像に向けて積極的なご議論を期待致します。

進行

ありがとうございました。それでは、ここから地域・医・工・農学部の順に、各学部の取組状況についてご報告させていただきます。

報告1

地域学部における学習支援の現状と課題

塩野谷 齊（地域学部・教務担当副学部長）

塩野谷でございます。よろしくお願いいたします。今回、「地域学部における学習支援の現状と課題」としてお話いたしますが、地域学部のなかでこうしたテーマについて議論した上でのことという訳ではなくて、

教務担当副学部長として 4 年目になりますので、私自身の感じるところをお話することで、ご容赦いただければと思います。

I 地域学部における授業評価

地域学部における授業評価ですが、この 5 年ほど見ても、悪くはない（スライド 2）。大変申し訳ないのですが、途中で評価項目、設問が変わっていますので、厳密な比較はできませんけれども、おおよそ相当するものとして引っ張ってきています。「授業の内容と進め方」については、5 点満点で 4 点台後半ということで、一応学生の満足度は高い、このように考えていいと見ております。

ただ課題は、学生の学習、学生自身の取組です。これはご覧の通り（スライド 3）、やはり 5 年の間に評価項目が変わっていますので、相当するものを引いてきましたけれども、残念ながら 4 に至るものは少ない。4 点ギリギリくらいのもが多く、全学と比較してもそんなに高くない、予習・復習にはそれほど力を入れているとは言えない現状ではないか。ちなみに授業 1 回あたりの予習・復習時間は、合わせて 1.4 時間という意味ではなく、① 30 分未満、② 30 分以上 1 時間未満という選択肢で平均をとったものですので、実際には 1 時間やっていないのが当たり前という、あまりよろしくない現状ということです。CAP 制を設けて学生の予習・復習時間を確保するように取り組んでいるところですが、ここに課題があるということになります。

II 学生の実態

1 要配慮学生

さて、一方で学生の実態ですが、これは全学的な問題ですが、いわゆる要配慮学生がどうしても私たちには気にかかることです。ちなみに近い年度でデータを拾ってきましたら、令和 3 年度前期は学部生で 16 名、令和 6 年度後期は学部生で 20 名、また印象では重篤なケースが増えてきた。実は、私の愚痴になりますが、本日 2 限、3 限、4 限と授業をもってありますが、加えて 1 限は緊急の打ち合わせでございました。学生対応で、かなり緊急なケースで、ちょっと精神的な疾患で対応を急いでいる、こういうことが結構飛び込んでくる、こうした現状です。

ただ、それだけではなくて、面談・検討した上で、配

慮を自分から取り下げる学生もおります。これは誠に残念なことですが、大学の対応にはあまり期待しない、という学生も、まれにできることがあります。もう自分のほうでがんばります、みたいな。それでも、丁寧に面談は行い、こちらでできることはしていかなければならない。

授業作りに関しては、かなり個別対応が必要になりますので、事前の授業準備も含めて、教員の負担も増してゆく。やらなければいけないんですけれども、実際のところは厳しい現状がある。

ちなみにこれは学生支援センターの HP に書いてあることですが（スライド 4）、ご覧の配慮が考えられる、そしてこれを 1 つ 1 つ丁寧にやっていかなければならない、という教員の負担というのはある。とくに精神的な疾患に関しては、本日もそうでしたけれども緊急の対応が必要なこともある。身体的な障害についても、個別に検討を進めていかねばならないケースもある。学生を責めるなどということは決してございませんけれども、1 人の学生のために、例えば同時オンラインのハイブリッド授業にするとか、様々な対応をやらなければいけない、こういう現状があるということです。

それから、要配慮ではなくても、実は様々な学生がいます。履修上の躓き、例えば想定外と言っているんですけど、単位不足によって卒業延期になってしまって、それで保護者の方がお怒りになるケースも極めてまれには起こります。それで、上の子が通っている「私学では事前にもっと親切に対応してくれた」と、お叱りを受けることもございます。それから学生の事故や事件もございます。学生同士の関係で、この学生とこの学生を近づけてはいけない、というような、そんなことまで私たちは配慮しなければいけない。おそらくこの学部でもあるのではないかと思いますけれども、地域学部もまたしかりです。

ただ、このような対応のなかで保護者の方と面談していると、なかなかご理解を得るのが難しい、それからもう少し我が子の現状に配慮してくれと言いたくなることのない訳ではない。ただしこれは難しい問題です。学生個人のことにに関して、たとえ保護者に対してであっても、ストレートには伝えがたいこともございます。もちろん緊急性を要する、生死に関わることであれば、

それは本人の頭越しに（保護者に）伝えることは当然ある。それは学生の利益だからです。でもこれは慎重にならざるを得なくて、おそろくかつてのようにスムーズにはいかないという苦しさがある。

2 学生の生活

それから学生の生活について、さらに背景を見ていきたいのですが、まず奨学金の受給状況です（スライド7）。今の学生はかつてよりも貧乏だと言われています。データを見ますと、仕送りも減っている。令和2年と6年を比べて、給付奨学金が増えていますし、果たして大きな変動と言えるかどうか、という問題はあるんですが、まあ厳しい状況です。アルバイトも、社会経験というより、生活のためにやっていたりする。なかには仕送りを全く受けないでやっていますという学生もいる。そうすると何が起こるかといいますと、はなはだ遺憾なのですが、つい弱気になってしまいます。授業中に寝ている学生がいましたら、以前でしたら起こしたんですけども、夜中にアルバイトをやって、がんばって自分の生活費から学費まで全て賄っていますというような学生にどこまで言えるか、つい思ってしまう。まあ困るんですけども、どっちが本業、学生の本分なのかという疑問があるのですけれども、なかなか言い難いところもある。これを言い訳にされては困るんですけども、こういう実態もあると思っています。

Ⅲ 入試の変更

1 入学志願者

それから入試にもちょっと関係すると思いますので、簡単に触れさせていただきます。入学志願者は、いわゆる隔年現象、ある年度に志願者が多いと、翌年には下がる、そしてまた増える。そこで何年かとばしてデータをもってきても意味がないので、志願者数を、単純に地域学科3コースから拾ってきました（スライド8）。極めて落ちているとは言えないのですが、なかには令和5年度のようにかなり厳しい状況の年度もあるわけで、とにかく学生を確保しなければなりません。そのなかで18歳人口は確実に減っている。ご承知のように、例えば戦後、団塊の世代の時に比べれば、今は出生数が3分の1より少ない状況になっています。1970年代最初の団塊ジュニアと呼ばれる時代から見ても相当減っている、私学などでは取り組んでいるように、入試の前

倒し、早い段階でとる。その際に必ずしも学力を問わないかたちの入試もあって、全く問わない訳ではないですけれども、そんななかで授業にももう少し丁寧な対応が求められる、従来とは違うやり方でなければ通じなくなっている面もあるかもしれない。教員の個別対応も今後ますます増えるかも知れない、こういうことが予想される。特に、学力試験によらない場合は、高等学校の成績を資料にと言っても、当然ながら高校間の格差の問題もありますし、単純には読み取ることができない。

もう一つ今言われているのは、私はもともとベースが教育学でありまして、その立場から申し上げますと、割と言われてきているのが、若者の読解力不足です。

〈参考〉にあげているのは（スライド9）、ご記憶の方もいると思いますが、「東ロボくんプロジェクト」（2011－16年）、つまりAIは東京大学の入試を突破できるか、おもしろいことやっているなと思ったんですけども、もう10年くらい前になってしまいます。私がびっくりしましたのは、複数の国公立大学や、いわゆる「MARCH」と呼ばれる大学に合格できる水準までには行っちゃったと、ただ東大の二次試験を合格するには至らなかったと、それはなぜなのかというと、問題文の読解がなかなか難しかった、ということがございます。

このプロジェクトに取り組んだ方の著書など読みますと、今日の中学生や高校生は読解力が大きな課題だと。要は問題文が読めないから、勉強しているように見えても、学力がつかないという現実がある、そんな分析がされていて、もしかしたらそういう世代が入学してくる。全国学力調査みたいなものでは、そういう著しい傾向があるのかなのか、はっきりは出ていないと思いますが、この指摘がその通りだとしたら、我々の授業のやり方も変わらざるを得ないのかなと。

2 学生の学力の変化と対応

そうしますと、学生が本来前提としてもっていると思われる読解力、それが十分でないまま入学してくる、そういう層が増えるとしたら、文献を指定して事前に予習をさせる、そして授業では演習や議論を中心とする、反転学習というやり方ですが、事前に学習したことを踏まえて、よりアクティブに、みんなでできる学習を進めてゆくというやり方、その方が理解は深まるだろ

うということなのですが、そういう「アクティブ・ラーニング」を実施してゆくとしても、予習そのものを十分にこなせない層がこれから増えてくるかもしれない。教科書を指定して、学生が読んでも、本当に理解しているのか。つまりなかなか深い学びには至らない可能性がある。ちなみにアクティブ・ラーニングという言葉はとても大事な言葉で、重視しなければなりません。ただし文部科学省などでは、アクティブというどうしても体を動かしているとアクティブっぽく見える、これでは主体的・対話的っていうのは見えやすいけれども、深い学びという意味が見えにくい、というので、「主体的・対話的で深い学び」という言い方も増えてきていますけれども、そういう意味で言えば、深い学びになかなか至らないかも知れない。

教育学の世界では戦後一時期、社会科教育などで言われたのは「這い回る経験主義」、経験的に体験を積みながら、学習を重ねて行く、でもそれでは「経験知」は得られても、我々が目指す「科学知」まではなかなか高まらない。ここが課題でございます。例えばこれが幼稚園や保育園の時代でしたら、経験知を十分もっておく、それをその後の小学校以降の学習で次第に科学知へと高めてゆく、そういうことが学校教育にとって必要なことですけれども、これが難しいこともあり得る。ちなみに先日、私は教科書を指定して使って授業をやっているのですが、教科書全てを逐一説明することはやっていなくて、事前に読んできて、それを踏まえてより深く説明したいところを重点的に説明する、こんな形でやっていたら、もっと教科書を教えて下さいって、学生に叱られました。これは教育学の世界では、「教科書を教える」か、「教科書で教える」か。私は「教科書で教える」、教科書の範囲の学びも大事なのですが、もっともっと応用できるように深めて、そして学びが楽しいというところまでもってゆきたい。でも学生に教科書を読む力が無いのであれば、教科書を教えることになる、こんなことも感じるところでございます。

大学教員の仕事というのは、もう忙しいと思います。ちなみに本日も私は2限・3限・4限と授業でございまして、息せき切ってこちらに参りましたけれども、お聞き苦しい点があったらお許し下さい。ただし教育面については、たとえ忙しくとも授業のレベルは落とさず

に、学生一般への対応をしなければならない、また要配慮学生への対応を行い、場合によっては保護者の方への丁寧なご説明も求められる、これを同時にこなしていけるのか、申し上げるまでもなく、「私たちは忙しいからやらない」ではもう済まされない。これは当たり前の話しです。

ただ地域学部にはとくに大きな課題としてコマ数問題、12コマを超える先生がどうしても多い。これは教員免許状をはじめ、免許・資格を出すと、そういうことが起きる訳であります。ちなみにこれは学部の多くの問題かも知れませんが、とくに人間形成コース、特別支援、保育、それから語学関係の方はどうしても増えてしまって、なんとかしたいとは思っているのですけれども、課題となっております。

それからもう一つ、コマ数が多い分は、非常勤講師をお願いして進めておりますけれども、他に本務をお持ちの先生ですと、集中講義のかたちで土日でないとか開講できない、ということで、世話教員が出てきて、鍵の開け閉めなども担当する、休日出勤になってしまうこともあります。やらなければいけないけれども、そういう現実があります。

IV 授業づくりに向けて

具体的な授業作りですが、こんな写真を見せると叱られるかもしれないですけど（スライド12）、私は教育学のなかでも幼児教育、保育学を専門としております。保育士養成、幼稚園教諭養成というのが、私の大きな教育上の仕事です。そこではアクティブ・ラーニングを意識するということは、既に言われる前から行っていたんですけど、例えば学生と一緒に積み木を積むようなこと、これは年に1回やるかやらないかです。コロナの時はさすがにやりませんでした。この写真はコロナ以前のもので、こうやって積み木を積むというのも、馬鹿にできるものではございませんで、積木自体、世界で最初に幼稚園を作ったドイツのフリードリヒ・フレーベル（1782-1852年）の発明品です。それから180年くらい経っています。後に幼稚園や保育園の現場などでは、かなり使われてきたものです。この理解がない保育者などは、私の感覚ではありえない。どうやって理解してもらうか。例えばたった1回、とりあえず積みます。スライド写真の積木遊びでは、グルー

ブロックのように積み木を積んで積んで、崩すんです。パーツを抜くと崩れます。ナイアガラの滝と呼んでおります。

その次です。学生たちはワーって盛り上がって、授業中だっていることを忘れることもあるんですけど、これを経験知で終わらせたくない。ではどうしてこれが出るのか、積み木って一体何なのか。積み木には基尺というものがあって、各辺が倍数で出ています。作りそのものがかなり正確です。材質も問います。例えば針葉樹よりも広葉樹のほうがいいのか、そういうことを説明して、そういうものだからこれが可能になるんだという実感を伴った積み木遊びをして積木理解を深めます。ちなみに「幼稚園教育要領」には、幼児にとって、遊びはその発達に相応しい学習だと書いてあります。そういう感覚をもって、積み木のフレーベルからの歴史、特性、材の選び方などに触れる。これは本学の「知と実践の融合」の一端につながるのではないかと、勝手に考えている訳ですけども、こんな試みをしています。

おわりに

最後に僭越ですが、教員の責任には4つあるという気がします。①まず自分が教えるべき内容や方法をもっていなければなりません。少なくとも内容については、私たちは研究者ですから、それは問題ありません。②もう1つは学生をよく見て、学生の実態をよく見る。学生理解を正しく持つということです。本日はこの点を強調したつもりです。③そして①②を踏まえて、私たちが専門としていることを、どう学生に伝えていけるか。すなわち、教育実践を行うということです。④それから4番目も重要で、どうしても自分の手に余る重篤なケースもありうる。そうした場合は、いつまでも抱え込まないで、場合によっては他の先生に委ねる、という決断もありえる。ただその時に、できれば共同で対処する。一人の先生では抱えきれないケースが増えていっているように思います。学生は変わります。学習能力・生活環境など。そのなかで学生理解みたいなことをさらに進めてゆく、それは今後も大きな課題になっていくだろうと思います。

ちなみに他大学の例、これは東京大学の法学部長からだいぶ前に聞いた話です。「以前は、学生の10人に

1人が理解できればよい、という感覚で授業していた」。つまり、今はそういう時代ではないという趣旨です。それから私立大学の例ですけど、着任後の新任教員に対するレクチャーで、ものすごく丁寧にやってくれと。そこである新任の先生が恐る恐る手を挙げて、「それは大学生を小学生のように扱ってほしいということでしょうか？」と聞いたら、担当の教員が「そうそう、正にその通りです」とうれしそうに答えた。私にはそういう感覚が無かったものですから、時代がそうなったのかな、と驚いた次第です。積み木の性質など教えたら、あとは学生たち自身で、私以上のものを作っていくまして、そしてこの2人は保育士になりました（スライド16）。活躍を祈っています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

報告2

医学部における学修支援： 医学部教育の特殊性と課題

中曾 一裕（医学部・教務担当副学部長）

米子キャンパスから参りました、医学部教務担当副学長の中曾と申します。よろしくお願いいたします。本日は全学FD・SD講演会として、学修支援に関するテーマで議論することになっておりますが、私ども米子キャンパス、医学部は、他学部比べて少し特異なところもございますので、それをご紹介しますことで、皆様方のアイデアの一端にでもなればと考えております。

医学部3学科の概要

まず医学部ですけども、ご存知の通り米子にございます。そのなかに3つの学科がありますが、「医学科」は6年間、米子キャンパスで過ごし、医師を目指すコースです。一方、「生命科学科」と「保健学科」の1年生は湖山キャンパスにお世話になっていまして、2年生以降、米子キャンパスで専門教育を受けるということになっています。生命科学科は、大学や企業等で研究者などを目指すコースですし、保健学科は看護師、臨床検査技師を目指すコースとなっています。